３．「漢委奴國王」金印―真贋論争から璽印考古学へ―

石川　日出志

１．実物資料としての「漢委奴國王」金印

江戸時代の天明 4（西暦 1784）年に志賀島で発見された「漢委奴國王」金印は，発見直後に亀井南冥が，『後漢書』記事中の「建武中元二年倭奴國奉貢朝賀…（略）…光武賜以印綬」の印とみなし，その判断は現在まで定説となっている。但し，江戸時代以来真贋論議が繰り返されており，近年も鈴木勉・三浦佑之両氏が，江戸時代の製品だと主張している（鈴木 2004・2010，三浦佑之 2006）。一方，中国では，1981 年に江蘇省甘泉 2 号漢墓で「廣陵王璽」金印が発見されて，その印文字の特徴が酷似することから，「漢委奴國王」金印を疑問視する意見はなくなり，後漢前期の標準資料と扱われている（孫 2010）。

日本の考古学界が後漢代の真印とみるのは，岡崎敬氏が 1968 年にこの金印の詳細な計測を行って，印面四辺の平均が 2.347 cmであり，西暦 81 年製の建初尺（23.5 cm）の 1 寸に合致すると述べた見解（岡崎 1968）を支持するからである。ところが，これまで「漢委奴國王」金印に関する議論は多数の蓄積があるものの，実物資料としての詳細な検討が行われておらず，これが偽物説を許容している。（なお，両氏の偽物説は，この金印の詳細な検討を促し，資料的検討が大きく進展する契機となった点は評価する。）実物資料としての「漢委奴國王」金印は，多角的・複眼的な検討が行われるべきである（図 1）。多角的・複眼的な検討を行って，それぞれどの程度の信頼性があるのか。また，相互に矛盾がないかを考察することによって，はじめて問題を解決に導くことができると考える。

私の結論は，＜「漢委奴國王」金印印面の 5 文字はすべて後漢初期の特徴をもち，金属組成・尺度・鈕形・鈕孔の検討結果とも相互に矛盾はない。そして，江戸時代にはこのうち尺度以外は知ることができないので，江戸時代につくることは不可能だ＞である。

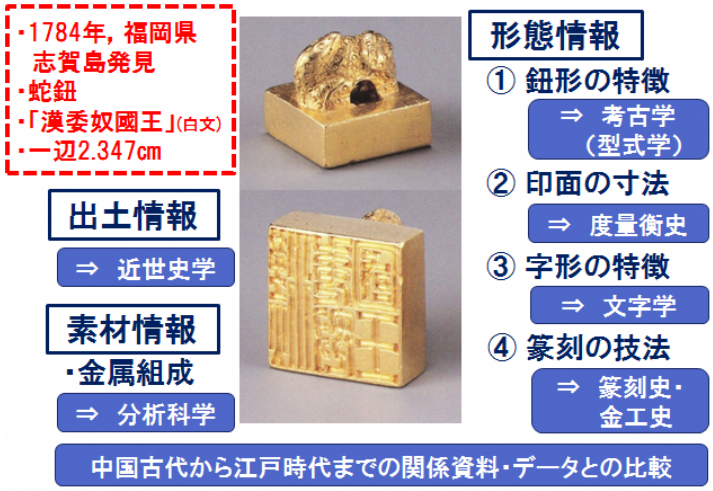

図 1　「漢委奴國王」金印の複眼的研究

２．尺度論の限界

岡崎氏は，後漢代の出土尺と現存する後漢建初尺（AD8-23 年）に照らし，この金印の一辺が後漢代の 1 寸に合致することから真印と判断した。後漢代の 1 寸が約 2.35 cmだと江戸時代には知り得ないと考えたのである。しかし，江戸初期から，漢代の 1 尺・1 寸の長さは分かっていた。この点を突いたのが三浦氏である（三浦 2006）。

江戸時代初期の中村惕齋（1629-1702）は，『律尺考験・三器攷畧』で，和漢古今 10 種の尺を比較し，漢代及び王莽代の銭貨の法量も検討して，漢尺を「唐尺七寸七分八釐二毫強」（23.57946 cm），すなわち 1 寸 2.358 cmと算出した。また，南冥にやや遅れる狩谷棭斎（1775-1835）も，『本朝度量権衡攷』で，後漢

尺を「曲尺七寸八分三氂三豪三絲二忽」(23.73496 cm) とし，「慮虎銅尺建初六年八月十五日造」銘尺も図示して「其長サ曲尺七寸八分四氂四豪」(23.76732 cm) とする。さらに，江戸時代には，中村惕齋の監造による中国古代尺が模造されており，現存する。岡崎氏が根拠とした「慮虎銅尺建初六年八月十五日造」銘尺も 12 点現存し，１尺平均 23.57 cmを測る（岩田 1979)。江戸時代に後漢代１寸≒2.35 cmは知られている。

しかし，遺跡で発掘された資料も確認しておく必要がある。岡崎氏集計の 1967 年時点では，漢代尺の出土例は 10 点，うち後漢代の実例は 5 例で，銅尺 4 点の平均 2.341 cm，骨尺 1 点 2.33cm で，5 点平均 2.339 cmであった。その後の集計としては，『中国古代度量衡図集』(国家計量総局 1981) がもっともまとまっており，戦国後期から西晋代までの 48 点が収録され，そのうち後漢代が 33 点ある。１寸の値を 0.025 cmごとに集計してみると，後漢代の出土尺の１寸は 2.35 cm前後に集中する（図 2)。最新の研究成果である『中国古代計量史』(丘光明 2012) も，両漢代の出土尺は 100 例近くにも上り，その半数以上が銅製で，前漢～王莽代は１尺 23 cm前後であったのが，後漢代になると約 23.5 cmに伸びると指摘する。

つまり，遺跡出土後漢代尺の１寸は確かに 2.35 cm内外であり，なおかつ江戸時代にも後漢代の１寸が約 2.35 cmだと分かっているのだから，尺度論で真贋論争を解決することはできない。

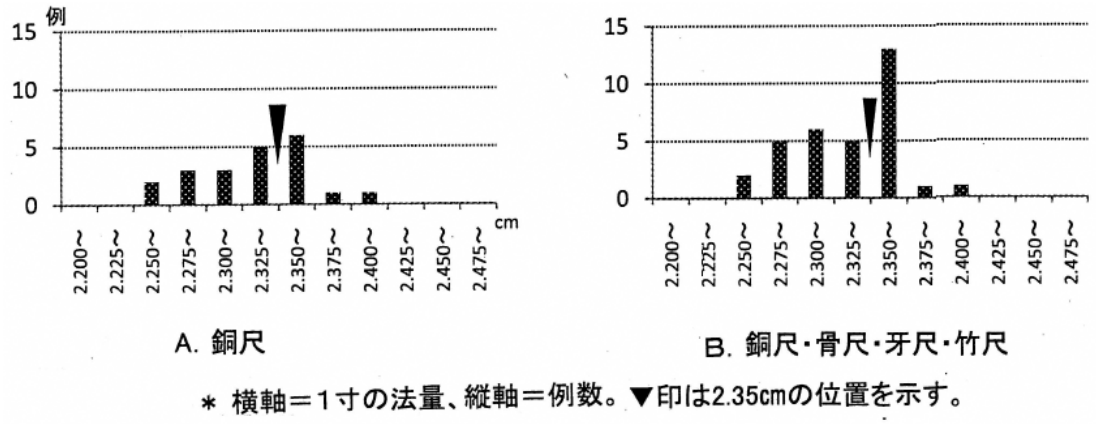

図２　遺跡出土尺の後漢代尺の１寸（『中国古代計量史』より作成）

３．金属組成の問題

金属組成の問題は，従来議論の展開が不十分であった。岡崎 (1968) は金印の比重も測定して 17.94 という値を得て，金と銅なら金 5.265 cm^3・銅 0.79 cm^{3}の比率になると復元した。岡崎は，金と銅の比率だけを復元したが，金と銀なら各比重は 19.30 と 10.50 なので，重量比で金：銀＝90.227：9.773 となる。1953 年に岡部長章も計測し，比重 18.1 と計測して金と銀の合金なら 22.06 カラット（金：銀＝91.917：8.083）だとした値と近似する。また 1989 年には，本田光子らによって蛍光X線分析が行われ，金：銀：銅＝95.1：4.5：0.5 の値が得られている（本田ほか 1990)。このように，90~95%という値が 3 回出されている。この値を中国古代以来各時代の金製品と比較するとどうなるか，各時代の遺跡から出土した金製品と比較してみよう（図３)。

中国では戦国代及び前漢代に金 92～99%という高品位の金製品がある。後漢末に下っても，青海省上孫家寨墓M53 墓の金箔で金：銀：銅＝93.90：5.64：0.1 という事例があり，日本列島の古墳出土ながら後漢末の製品である奈良県東大寺山古墳出土の中平年 (AD184-189) 銘鉄刀の金象嵌は 99.3～99.9%の高

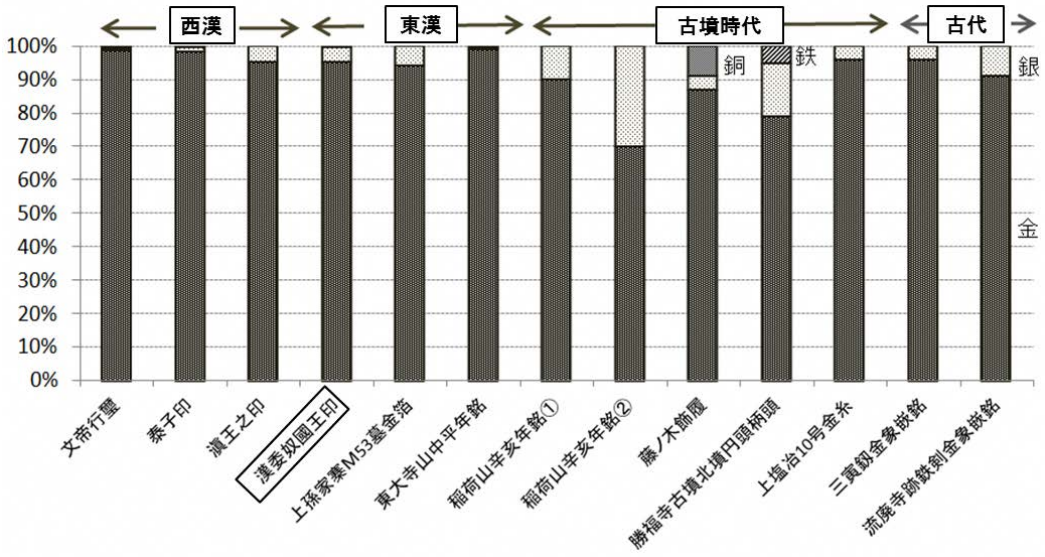

図３　中国前漢～日本古代の金製品の金属組成の推移

品位である。日本列島出土品では，古墳時代になると金の組成比が 70～90%に低下するが，古代には再び 90%以上となる。こうした中国戦国代から日本古代の金製品の金属組成の推移からみて，「漢委奴國王」金印の値は後漢代の金製品として全く矛盾はない。ここで重要なことは，江戸時代に後漢代の金製品の金純度は知り得ない点である。

４．蛇鈕の類型化と年代

蛇鈕が前漢代から晋代まで形態変化を遂げることは，すでに何人もの指摘がある。しかし，蛇鈕の実例を集成した上で類型分類し，編成を具体化するのが考古学の原則であるが，そうした前例はない。

蛇鈕については，これまで蛇鈕・虺鈕・蟠蛇鈕と報告された例や，鈕に蛇を表現した実例を 58 例確認している。このうち，画像がない例や，特徴を具体的につかめない例，玄武の一種と思われる例などを除いた 42 例を分類対象とする（表１）。戦国代の１例が最古で，王莽代の実例を欠くものの，前漢代から晋代に及ぶ。

分類基準は，検討作業の再現性を保証するために，明解である必要がある。そのため，①印台と鈕の接合状態，②蛇体の基本形態，③蛇体の細部形態の，３つの階層で分類する（表２）。各分類の代表例を図４に掲示した。Ｉ類は印台上に蛇形が独立して載るものである。ＩA 類は鼻鈕形の前後に蛇の屈曲する頭部と尾部が付き，ＩB 類は，蛇体が前から後方へ螺旋形を呈する。

表１　蛇鈕印の諸例とその類型

ＩＢ類の頭部がＩＡ類のように前方ではなく脇を向く点や尾部が渦形をなす点は，ⅡＡ１類へと継承される。Ⅱ類は，印台と蛇体が面的に付着するものである。ⅡＡ１類では尾部が大きな渦形を呈するが，ⅡA2 類では蛇体の横幅が狭くなり，蛇体形態が簡素となる。ⅡA2 類は，大塚紀宜氏の指摘の通り（大塚 2008・2009・2015），当初駝鈕として製作されたのち，蛇鈕に再加工されたものである。鈕孔の前後に横凹線が走り，その周辺をよく見れば明解である。蛇の頭部は，ＩＢ類で螺旋形となり，ⅡA1 類で後方に巻き，ⅡＡ2 類で後方に屈折反転する。ⅡB 類は，蛇体の左右が平行線化したもので，再加工品であるⅡＡ2 類をモデルとして形式化した一群である。ⅡB1 類は頭部と尾部が胴部の左右に置かれ，蛇体がかすかに螺旋形をなすが，ⅡB2 類では螺旋形がなくなる。ⅡB2 類は頭部が前方上部で後方を向き，蛇形よりも駱駝形に近いが，側面の螺旋形の溝で蛇形だと分かる。ⅡC 類は蛇体の上面観が円形に近くなり，頭部が中央上部に置かれるものである。こうした類型化により，一連の形態変化が明確となった。

以上の各類型を，印文やその特徴による所属時期ごとの例数をみたのが表３である。まだ例数が少ない点は注意を要するが，〔ＩＡ類〕→〔ＩＢ類・ⅡA1 類〕→〔ⅡA2 類・ⅡB1 類〕→〔ⅡB2 類・ⅡC1～3 類〕という変遷が確認できる。

ⅡA2 類は「漢委奴國王」金印が

No	分類	印　文	印面	時代	素材	所蔵者	主要文献
1	ＩＡ	臧軥信鉨		戦国	銅	上海博物館	孫1995：p. 144
2	ＩＡ	浙江都水	田字格	秦	銅	上海博物館	孫2010a：p. 67
3	ＩＡ	襄陰丞印	田字格	秦	銅	香港中文大学	孫2010b：p. 21
4	ＩＡ	旃郎廚丞	田字格	秦	銅	故宮博物院	方2008：No. 38
5	ＩＡ	白水七丞	田字格	秦	銅	故宮博物院	方2008：No. 41
6	ＩＡ	琅左鹽丞	田字格	秦	銅	上海博物館	孫1999：p. 43
7	ＩＡ	宇丞之印	田字格	秦	銅	上海博物館	荘・茅1999-No. 246
8	ＩＡ	左畧桃支	田字格	秦	銅	天津芸術博物館	荘・茅1999-p. 36-239
9	ＩＡ	黨丞之印	田字格	秦	銅	菅原石廬	菅原2004：No068
10	ＩＡ	代馬丞印	田字格	秦	銅	故宮博物院	荘・茅1999：No. 250
11	ＩＡ	彭城丞印	田字格	秦	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144-14
12	ＩＡ	潁川榦丞	田字格	秦	銅	個人蔵	許2017：059
13	ＩＡ	江湖榦官	田字格	秦	銅	個人蔵	許2017：060
14	ＩＡ	杜郵丞印	田字格	秦	銅	個人蔵	許2017：061
15	ＩＡ	雝丞之印	田字格	西漢	銅	故宮博物院	孫1993：No317
16	ＩＡ	平陸丞印	田字格	西漢	銅	上海博物館	孫1999：p. 33
17	ＩＡ	趙臨	半通印，有格	西漢	銅	故宮博物院	羅1982：p. 100-561
18	ＩＡ	新淦丞印		西漢	銅	寧楽美術館	神田・田中1968：p. 39
19	ＩＡ	犍為太守章		西漢	銅	寧楽美術館	金子2001：p. 354
20	ＩＢ	滇王之印		西漢	金	中国国家博物館	雲南省博1959
21	ⅡＡ1	労邑執刲		西漢	琥珀	広西壮族自治区博物館	金子2001：p. 353
22	ⅡＡ2	漢委奴國王		東漢	金	福岡市博物館	名古屋市博1989：p. 71
23	ⅡＢ1	蛮夷里長		東漢	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144
24	ⅡＢ1	漢叟邑長		東漢	銅	寧楽美術館	加藤1986：p. 9
25	ⅡＢ2	漢夷邑長		東漢	銅	寧楽美術館	加藤1986a：p. 10
26	ⅡＢ2	魏蛮夷率善邑長		魏	銅	故宮博物院	羅1982：p. 70
27	ⅡＢ2	魏蛮夷率善邑長		魏	銅	小林斗盦旧蔵	大谷1974：pp. 144
28	ⅡＢ2	魏蛮夷率善仟長		魏	銅	上海博物館	孫2010a：p. 126
29	ⅡＢ2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	藤井有鄰館	大谷1974：pp. 144
30	ⅡＢ2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	上海博物館	孫1999：p. 131
31	ⅡＢ2	晋蛮夷率善仟長		晋	銅	故宮博物院	方2008：p. 155
32	ⅡＢ2	晋蛮夷率善邑君		晋	銀	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 23・97
33	ⅡＢ2	晋蛮夷率善邑長		晋	銅	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 24・98
34	ⅡＢ2	晋蛮夷率善邑長		晋	銅	湖南省王鳳坪村	陳2004：p. 24・98
35	ⅡＢ2	晋蛮夷率善邑長		晋	銅	大谷大学図書館	竹田1964：368
36	ⅡＢ2	晋蛮夷率善佰長		晋	銅	大谷大学図書館（旧梅華堂蔵）	竹田1964：369
37	ⅡＢ2	晋蛮夷率善佰長		晋	銅	天津市芸術博物館	李1997：p. 70
38	ⅡＣ1	蛮夷邑長		魏	銅	故宮博物院	葉1997：p. 141
39	ⅡＣ1	親晋王印		晋	銅	故宮博物院	葉1997：p. 141
40	ⅡＣ1	晋屠各率善仟長		晋	銅	個人蔵	許2017：136
41	ⅡＣ2	呉蛮夷邑長		呉	銀	個人蔵	呉2013：No. 071
42	ⅡＣ3	蛮夷侯印		晋	金	湖南省平江県文物管理所	孫2010a：p. 141

表２　蛇鈕の類型分類

分類の３階層 1	2	3	分類基準：　階層１＝印台と鈕の接合状態，　階層２＝蛇体の基本形態，階層３＝蛇体の細部形態．	資料番号
Ⅰ	鈕の蛇体が独立して印台の上にのるもの．			
	A		蛇体胴部が直線的なもの．幅狭い鼻鈕の前後に頭部と尾部が付き，頸と尾は屈曲する．	1～19
	B		蛇体が頭部から尾に向かって螺旋形をなす．鼻鈕形態を脱し、蛇体が明確に独立する。	20
Ⅱ	鈕の蛇体が印台と面的に付着するもの．			
	A	蛇体の前後に頭と尾がそれぞれ螺旋形をなすか，反転するもの．		
		1	頭部と尾部がともに渦形をなすもの．	21
		2	頭部が反転するものの渦形に至らないもの．駝鈕の再加工品．	22
	B	胴部が左右扁平で，蛇体の螺旋形が硬化したもの．		—
		1	胴部を上から見ると楕円形を呈し，頭部と尾部は左右反対側の側面に作出される．	23・24
		2	胴部の左右側面が直線的である．後方を向く頭部を前方上部に置き，尾部は後方上部に簡略に表現するか，不明瞭となる．	25～37
	C	蛇体の上面観が円形状をなすもの．頭部は鈕孔から上方に延びる．		
		1	頭部が明確ではないもの．	38～40
		2	後方を向く頭部が鈕孔上方に置かれるもの．	41
		3	頭部を中央上方に作り，胴部から尾部へと螺旋形を描くもの．	42